

BELIEVER'S  
BIBLE  
COMMENTARY

新約聖書注解 1

マタイ→ヨハネ

ウィリアム・マクドナルド [著]

アーサー・ファースタッド [編]

NEW TESTAMENT

vol. 1

Matthew→John

WILLIAM MACDONALD  
Contributions by Arthur Farstad

# 新約聖書注解 1

---

マタイ→ヨハネ

ウィリアム・マクドナルド著  
アーサー・ファースタッド編

伝道出版社

*Believer's*  
BIBLE  
COMMENTARY

---

WILLIAM MACDONALD  
EDITED BY ART FARSTAD

PUBLISHERS  
THOMAS NELSON  
NASHVILLE • ATLANTA • LONDON • VANCOUVER

EVANGELICAL PUBLISHERS  
TOKYO, JAPAN

# 目次

著者による序文 .....	7
編集者による序文 .....	8
新約聖書について .....	10
福音書について .....	13
マタイの福音書 .....	18
天の御国 .....	30
福音 .....	39
信者と律法の関係 .....	43
離婚と再婚 .....	47
断食 .....	53
安息日 .....	87
マルコの福音書 .....	185
ルカの福音書 .....	259
ヨハネの福音書 .....	397

## 著者による序文

この注解書は、普通のクリスチャンが聖書を本格的に学びたいときに役立つことでしょう。けれども、どんな注解書でも聖書に取って代わることはできません。注解書にできることと言えば、おおよその意味をわかりやすく説明し、読者がさらに聖書を学ぶように仕向けることだけです。

この注解書には、むずかしいことばや専門用語は用いていません。学術的、神学的なものではありません。たいていの信者は聖書の原語に通じてはいませんが、みことばから実際的な利益や恩恵を受けることは、だれにでも可能なのです。聖書を組織的、系統的に学ぶことによって、どんなクリスチャンでも「真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人」(Ⅱテモテ 2:15)になれると確信しています。

それぞれの注解は短く簡潔で、しかも要を得ています。ある箇所に関して助けを得るために、読者が、何ページにもわたる説明を我慢して読み通す必要はありません。今日のようにだれもが忙しい状況では、真理ができるかぎり要約されたかたちで伝えられなければならないのです。

むずかしい箇所にも注釈を加えています。多くの場合、いくつかの解釈を記すことによって、どの解釈がその文脈(そして聖書全体)に照らして最もふさわしいか、その判断を読者にゆだねています。

聖書知識だけでは十分ではありません。みことばを実際の生活に適用しなければなりません。そのため、この注解書では、神の民がみことばを生活の中に生かすことができるということを示そうと努めています。

もし本書が最終目標になってしまうなら、本書を用いることは(助けではなく)わなになってしまいます。もし本書が用いられることによって、聖書を学ぶことへの興味がいつそう刺激され、主の教えに従おうとするなら、本書はその目的を達したことになります。

みことばをとおして神を知るといえるのは、すばらしいことです。どうか聖霊が読者を教え、導いてくださいますように。

## 編集者による序文

「注解書を軽んじてはならない」。1950年代末期のエマオ聖書学校(現在は大学)の授業で、ある教師がこのように助言してくれました。少なくとも一人の学生が、その後もずっと、そのことばを覚えていました。その教師とは、この注解書の著者であるウィリアム・マクドナルド氏。その学生とは、編集者である私アーサー・ファースタッド(当時は青二才の新入生)でした。彼はそれまで、エペソ人への手紙に関するH・A・アイアンサイドの注解書しか読んでことがありませんでした。まだ10代の頃の夏に、毎晩その注解書を読み、アーサー・ファースタッドは注解書というものが何であるかを知ったのです。

### 注解書とは

注解書とは正確には何であり、なぜ私たちはそれを軽んじてはならないのでしょうか。最近、ある有名なキリスト教出版社は聖書関連書籍を15種類に分けました。注解書がほかの学びの本とどう違うのか(あるいは、聖書地図、聖書辞典、聖書語句辞典とどう違うのかといったことまで含めて)正確には知らない人がいたとしても、少しも驚くべきことではありません。

「注解」とは、本文の語句や文章の意味を、一節ごとに、あるいは段落ごとに解き明かすという意味です。あるクリスチャンたちは注解書を一笑に付し、「私が聞きたいのは自分に語られるみことばだけだ。だから聖書そのものを読む」と言われます。信心深く聞かえますが、そうではありません。注解書とは、(最も難解な部分も含めて)聖書の教えが詳細かつ明確に解説されたものが、単に活字になっているだけのものです。注解書の中には(アイアンサイドのもののように)、公場で学ばれたことを、そのまま活字にしたようなものもあります。そのうえ、英語であれば、あらゆる時代、あらゆる言語のすぐれた注解書を手に入れることができます。あいにく、多くのものはあまりにも古く、時代遅れで、また、あまりにも難解なため、普通のクリスチャンは(閉口してしまう、とは言えないまでも)落胆してしまいます。ですから、普通の信者のために書かれた、わかりやすい注解書が必要なのです。

### 注解書の種類

理論的には、聖書に興味がある人ならだれでも注解書を書くことができます。そのため、極端に自由主義的なものから非常に保守的なものまで、様々な考え方のものがあります。この注解書は、聖書を「信仰と実践のために全く十分な、神の靈感による完全な神のみことば」として受け入れている点からも、非常に保守的なものと言えます。

注解書といっても、(たとえば、ギリシャ語、ヘブル語の構文について詳しく説明して



あるような)高度に専門的なものから、概略しか書かれていない、あまり内容のないものまで様々です。本書はその間のいずれかに位置しています。専門的な事柄はおもに巻末の「後注」に記されていますが、本文にも、難解な箇所や心に迫る適用を避けることなく記されています。マクドナルド氏による本書は、詳細かつ明確な説明に富んでいます。その目的は、(ありふれたクリスチャン、最低水準で満足している今日の平均的なクリスチャンではなく)弟子を生み出すことを助けることです。

注解書はその著者の神学的な立場によっても変わってきます。保守的か自由主義的か、プロテスタントかローマ・カトリックか、千年王国前再臨説か無千年王国主義か。この注解書は保守的な立場であり、プロテスタントであり、千年王国前再臨説に基づいています。

## 本書をどのように用いるか

この本の使用方法はいくつかあります。

- ① もし読者が聖書愛しておられるなら、この本のページをばらばらめくってあちらこちらを拾い読みされるだけでも、本書の内容を味わい、楽しむことができるでしょう。
- ② 読者は、ある一節(あるいは段落)に関して疑問を持っておられるかもしれません。文脈にも考慮しながら調べてみてください。きっと良い手がかりを見いだされることでしょう。
- ③ もし読者が特定の教理、たとえば安息日、バプテスマ、選び、三位一体といったテーマについて学んでおられるなら、そのことを扱っている箇所を調べるとよいでしょう。目次を参照くだされば、どのようなテーマが特に解説されているかがわかります。本書で取り上げていない主題に関しては、聖書語句辞典を用いることによって、聖書のどこでその問題が扱われているかを見いだしてください。
- ④ 読者が属しておられる集会(教会)の学び会、聖書研究会、日曜学校などで、新約聖書を順番に学んでおられるかもしれません。該当箇所を前もって読んでおけば、大いに役立つことでしょう(ほかの人たちも本書を用いていることがわかれば、あなたはほかの注解書も欲しくなるかもしれません)。
- ⑤ 最終的には、どのクリスチャンも聖書全体を読み通すべきです。どの書巻にも難解な箇所があるので、本書のように詳細かつ保守的な本を用いることによって、あなたの学びの質や能力は大いに高められることでしょう。

聖書研究は最初のうちは退屈に思えるかもしれませんが、学びを進めて行くに連れて、たいへん味わい深いものとなります。

マクドナルド氏のかつての助言は、「注解書を軽んじてはならない」でした。英語新欽定訳に基づいて本書を編集させていただいた私は、この注解書を大変注意深く読み終えた者として、さらに一歩進んだ助言を差し上げることができます。「どうぞ、この学びを楽しみ、味わってください」と。

# 新約聖書について

「これらの書巻の価値——霊的および歴史的な価値——は、それらの『数』や『長さ』とは全く不釣り合いなものであり、それらが『歴史』と『人生』に及ぼす影響は計り知れないものである。エデンの園で夜が明け始めた1日の真昼がここにある。旧約聖書で預言されたキリストは、福音書で歴史上のお方となられた。各書簡で、私たちが経験することのできるお方となられ、黙示録で、栄光あるお方となられた」。

W・グレイアム・スクロギー

## 1. 「新約聖書 (New Testament)」 という名称

新約研究という深い海に(または、ある書巻を研究するという「比較的小さな範囲」に)飛び込む前に、英語で「The New Testament (新約聖書)」と呼ばれる聖典について、一般的な事実をいくつか手短かに述べておこう。

「Testament (遺言)」も「covenant (契約)」も同じギリシャ語を訳したもので、ヘブル人への手紙には、どちらの訳のほうがよいのか、議論の余地のある箇所が1箇所(もしくは2箇所)ある。クリスチャンの聖典の表題には「covenant (契約)」という意味のほうがふさわしいと思われる。聖書は神とその民との間の約束、協定、契約となっているからである。

旧約聖書と対比するために新約聖書と呼ばれている。

旧約聖書も新約聖書も神の靈感によるものである。したがって、どのクリスチャンにも有益なものである。しかし、キリスト

にある信者の目はしばしば新約聖書のほうに向くものであり、むしろそれは自然なこととも言える。新約聖書には、主イエスとその集会(教会)について、また、主の弟子たちがどのように歩むべきかについて明言されているからである。

アウグスティヌスは旧約聖書と新約聖書の関係を次のように適切に表現している。「新約は旧約のうちに隠されており、旧約は新約のうちに現されている」。

## 2. 新約聖書正典

「canon (正典)」(ギリシャ語は「カノン」ということばは、「定規」や「物差し」という意味で使われる)英語の「rule」に相当する。物の長さや物事の価値をはかる尺度という意味である。新約の正典は、神の靈感による書を集めたものである。正典に含まれるのが27の書物で、それ以上でもそれ以下でもないのはどうしてだろうか。クリスチャンが書いた手紙や書物は(異端のものも含めて)ほかにもあったのだから、



これら 27 の書物がそれぞれ正しいものであるということをして確信できるのだろうか。

紀元 4 世紀の末に、教会会議が正典目録を作成した、としばしば言われる。しかし、その目録に含まれた書は、実際には書き上げられた直後に「正典」と認められていた。ペテロがパウロの書を認めたように(Ⅱペテロ 3:15, 16)、識別力のある敬虔な弟子たちは、神の靈感による書がどれであるかを最初から認めていた。けれども、いくつかの書(たとえば、ユダの手紙、ヨハネの手紙第 2 と第 3 など)に関しては、教会によつては、ある時期まで論争があった。

一般的には、その書が(マタイ、ペテロ、ヨハネ、パウロといった)使徒によるものであったり、(マルコやルカといった)使徒の同労者によるものであったりすれば、その書の正典性については全く疑いはなかった。

今日の正典を正式に認めた会議は、実際には、すでに何年にもわたって一般に受け入れられていたものを確認したにすぎなかった。そのとき作成されたものは、靈感された「書物の目録」ではなく、「靈感された書物」の目録だったのである。

### 3. 著者問題

新約聖書の真の著者は聖霊である。聖霊なる神の靈感によって、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、パウロ、ヤコブ、ペテロ、ユダ、そしてヘブル人への手紙の著者が書き記したのである。新約の各書がどのように作り出されたのかを理解するためには、「二重著者(dual authorship)」という考え方をしなければならない。新約聖書は「ある部分は人間によるもので、それ以外は神によるもの」ではなく、「すべてが人間によるものであり、同時に、すべてが神による

もの」なのである。神によるものであるがゆえに、人間の手によるものであっても、誤りが全くないのである。その結果、原本においては、誤りのない完璧な書物ができあがったのである。

「生けることば」であるお方(主イエス・キリスト)にも同じようなことが言える。主は(ギリシャ神話に出てくる「神々」のように)ある部分が人で、それ以外の部分が神というのではなく、完全に人であり、同時に、完全に神である。神の性質を持っておられたため、人として罪や過ちを犯すことはあり得なかったのである。

### 4. 年代

旧約聖書は千年ほどかかって完成したが(前 1400 年頃-400 年頃)、新約聖書は半世紀を要したにすぎない(紀元 50 年頃-100 年頃)。

新約の書巻が現在の順序で並んでいるのは、いつの時代の教会にとっても最もふさわしいことである。キリストの生涯が始まり、次に教会について語り、その次にその教会に命令を与え、最後に教会とこの世界の未来を明らかにしている。けれども、各書は書かれた順に並んでいるのではない。それらは、必要が生じるたびに書かれたのである。

最初に書かれたのは、設立されてまもない諸集會に書かれた手紙であった。それらはヤコブの手紙、ガラテヤ人への手紙、テサロニケ人への手紙で、おそらく、1 世紀の半ば頃に書かれた。

執筆された順では福音書が次で、マタイの福音書からマルコの福音書が最初、次にルカの福音書、最後にヨハネの福音書と続く。

最後に書かれたのはヨハネの黙示録で、おそらく 1 世紀の終わり近くだろう。